

第9章

新たなる連携へ

これまでは、産学官連携活動の基本となる大学内外の体制整備、地域における連携活動等の事例を紹介してきた。この章では、大学を中核とする知的連携が文部科学省産学官連携コーディネーターにより多面的に拡大している事例が紹介されている。

また、この章ではこれらの新たなる事例を、「学際的連携」では医工連携、「広域的連携」では大学等のネットワークの構築、「他制度産学官連携人材との協働」、「産学官連携ネットワークの構築」および、今後拡大が期待されている「国際的連携」の視点から紹介している。

新たな 連携へ

学際的連携

医学部を持たない大学の医工連携

キーワード：学学連携・医工連携・地域連携・学際的連携

本事例の関係者
静岡大学
 教員・産学連携関係者
浜松医科大学
 教員・産学連携関係者
その他近隣大学関係者
地域の支援機関
企業の研究者

文部科学省産学官連携
コーディネーター

イベントを重ね、段階的に活動を充実強化

【要約】

ここ数年来、大学や研究機関が将来に向けて充実すべき重要領域の中に、ライフサイエンス、保健、医療、福祉等が大きく位置づけられてきている。静岡大学は総合大学であるが部局として医学の領域を持っていない。しかし、至近に浜松医科大学が存在することから、コーディネーターは両学間の学際的連携に意識的に取り組み、成果に向けた段階的推進を重ね、実績への糸口を得てきた。

【きっかけ】

以前から、学内教員の一部は、ライフサイエンスや医療面との学際的研究課題に取り組んでいたが、ここ数年その傾向は顕著になってきた。こうした中、平成18年に工学部と浜松医科大学とで両学の学際的ニーズ、シーズ情報交換発表会をもったことを発端にして、コーディネーターは、両学がより組織的關係強化を図り成果に繋げることを目指し活動することとした。

【段取り・プロセス】

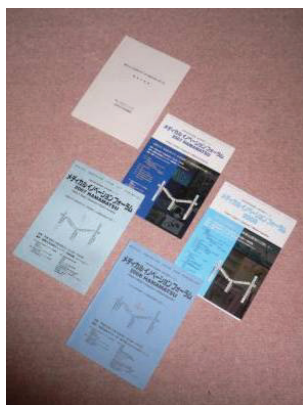
●**イベントを契機に、段階的に内容を拡充**
上記により、両学は翌年の平成19年2月に教育・研究での学学連携協定を締結した。地域の財団の支援も受けて両学は同一地域への貢献を念頭に、具体的連携プロジェクトの検討に入ったことになった。

当初、浜医大に専従のコーディネーターが置かれていなかったこともあり静岡大学のコーディネーターが2学の関係教員と積極的に面談を重ねた。平成19年秋に2学連携のフォーラムを、平成20年秋には豊橋技科大も加え3学連携のフォーラムを開催、これらを契機にしつつ、両学での連携課題も増えてきた。

【成果・結果や活動後の変化】

●**現在までに5件の連携プロジェクトが稼働**
現在5件の連携プロジェクトが動いている。その道筋は一樣ではないが、初期の取り組みでもあり、大部分が臨床や許認可を必要としないもので数年で成果を掴むことでスタートしている。またこれらは単純な支援業務連携でなく、両学のアカデミアとしての意義を高める目的も崩していない。

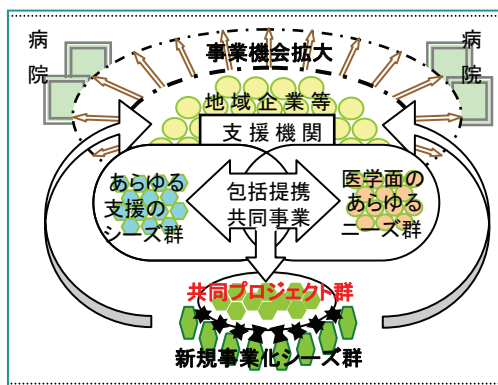
●**イベントを契機に、段階的に内容を拡充**
年毎のイベント開催の主要部分の構成に、次のような意図を盛り込んできた。①イベント毎に新たな連携プロジェクトの企画を打ち出す。②経過進度によって状況を報告する。③連携候補となる多くのニーズ、シーズを公表する。④連携の成功事例報告を入れる。こうした意図が段階的に取り組みの進展を促している。



実績イベントの資料集

ステップ

平成18年8月
 医工連絡会
平成19年2月
 教育・研究連携
平成19年11月
 2大学フォーラム
平成20年11月
 3大学フォーラム
現在5件の連携プロジェクト



狙いのコンセプト

成功の事例

牽引力と地域の支援で条件整備

●牽引役の存在と、理念やコンセプトを共有化している

本件は、スタート時点から両学執行部が前向きな姿勢を示してくれた上に、静岡大のセンター長と浜医大の担当副学長とが牽引役として積極的であったことが、何よりの推進力と言える。単なる掛け声でなく、理念や狙いのコンセプトを共に設定して共有化したことも、行動をぶれさせないポイントとなっている。

●ステップを刻むための支援がある

本活動の主旨に対して、地域の財団が理解を示し、イベント開催への支援に積極的に牽引努力してくれることが、年毎にスパイラルアップさせていく重要な要件となっている。

●目指す成果と関係教員にとっての意義に拘る

2学連携に当初から遠大な計画で息切れしない為にも中期的視点で成果を狙えそうな課題を優先しているが、何れも成功した暁には社会的意義の高いものが揃っている。しかも重要な点であるが、双方教員にとっての挑戦的要素が入っている点も教員のモチベーションを高く保っていると言えよう。

新たなる 連携へ



年々盛況化する
連携フォーラム

失敗の事例

肝心な機能整備がないままで走り出していた

●適切な課題も原資なくして進捗できず

既述のプロジェクトの1つに、コーディネーターとして大きく焦りにも似た受け取りをしているものがある。それぞれの領域で著名な両学の教授の研究を基に企画した画期的と思われるプロジェクトが、外部資金獲得に繋がらずに頓挫している。当然次への機会を狙っているが、時は容赦なく過ぎていく。別件の新企画も、両学ならではの秀逸企画と考えているが、目下、採択の結果待ちの状態が気が抜けない。

●連携プロジェクト推進の重要機能に脆弱さがあった

シーズとニーズの絶妙な結合で得た飛躍的な目標も、協働できる企業の選定や見通しを得るまでの活動原資に対するリスク対処はいかにするべきか。諸制度の理解や申請内容の作り込み能力向上をはかるのは当然として、プロジェクトとしての「死の谷」「ダーウィンの海」を超える仕組みが不可欠である。組織的連携としても備えるべき必要機能として捉えていない脆弱さがあった。

成功と失敗の 分かれ道

単なる連携では越えられないリスクを、事前に検討する企画機能ができて、初めて本物の組織連携と言えるのだろう。

産学官連携の新たな展開に向けた提言

プロジェクトの連携を超えた機能の連携へ

●企画時点でのリスクを減らすこと

学と学との連携は、産学連携に比べれば、出口までは遠くリスクも多い。シーズとニーズの絶妙な掛け算に可能性ができた時点で「目指す最終成果の意義の高さ」それを普遍化させ得る「事業性」、そこまでもっていく「原資の見通し」。暫進的に管理しつつも、頂上まで行きつく最大の力は、推進者の知恵と汗に掛かっているとも言われる。多くの事例に学びつつも、外的条件で頓挫させない企画と進捗の術を、実務を介して蓄積し伝承していかなければならない。

●工夫を重ねて機能する組織連携に進化させること

動き出した両学の連携を持続的に発展させる術が要る。共に自学内に無い要素の結合が生み出す新たな可能性のために、両学間ならではの術を編み出し続けねばならない。コーディネーターネットワークや「目利き・制度間つなぎ担当」など多く方々の知恵をお借りして、機能強化を急ぎたい。

☆コーディネーターの一言

コーディネーターは「最初のひと転がしで動かした後は、行き先に出てくる障害を予測し対処して、転がり先を案内して終点までフォローしていく。」ここまですることが理想なのだろう。心構えはプロジェクトリーダーと同じといえる。